



白標

梅譜

梅心家集

卷之二

德玉梅譜

序

世に梅若あるは心と梅と
若くは心と梅と所謂心と梅と
能くあるは心と梅と心と梅と
心と梅と心と梅と心と梅と
心と梅と心と梅と心と梅と

Handwritten text in Arabic script, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, starting from the right side of the page and moving towards the left. The script is cursive and appears to be a form of Arabic or Persian calligraphy.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a specific note.

Handwritten text in a circular stamp or seal, located on the left side of the page.

Handwritten text in the middle of the page, possibly a title or a specific note.

Handwritten text on the right side of the page, possibly a signature or a specific note.

Handwritten text on the right side of the page, possibly a signature or a specific note.

Handwritten text on the right side of the page, possibly a signature or a specific note.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian, consisting of approximately 10 lines of text.

اسی وقت میں ہوا

میں سے کچھ نکل گیا

میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا

میں نے اس کو دیکھا
میں نے اس کو دیکھا

梅室の巻上

山梨且之記

えりや鬼引くも縁のこ

えりや二百にわれと世にたし

えりよかくて二りの世をさるる

東に大場東あうりや

あつとほすさの金帳り

あつとほすさ

海のつらさ
はらうやこころをこころしく
海路のまのあたりにかちゆりぬ

海路 くらさ

海路のつらさ
みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく

みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく

海路 くらさ

みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく
みこころをこころしく

人の心は田へのこもつた草に
まゝの草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに

わらわ

わらわの心は田へのこもつた草に
まゝの草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに

まゝの草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに

わらわ

まゝの草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに
よこした草をさしてゆくまゝに

実ぬ 残さる

人の物はおぬ物もあつてもはる

らやうとてはなむいふ

およつてや信にふとと思つた

あつてもやうとてあつても

かゝるやうにやうにやうに

ふとつてはなむいふ

梅

梅さうや梅くはくかけの

袖又うとてはなむいふ

はるるのまらとてはなむいふ

梅の月とてはなむいふ

か

ふたまたの枝とて梅をち枝れ

追憶

ちと梅といふもののまらとて

人ふをささるや山家の梅の月
はくろや船を糸うり角らめの歌
梅らく一人とせば後一りの
ら向や垣乃そらもく欠のむ
おひかや細えんあれ梅のささ
たそく梅をほめられたるうれ
をくられ七谷をくまらつ梅花
垣をす枝のさしたるくらのむ

日ハ細く梅ほらくくとあやれくあ

多分文

傾きく梅をささくゆよぬ庵の友
くせりくまあくもさくや約能等
いりの金尾のそりてふ所より
おをれ屋をさく梅のささくれ
沖のささくめくくをくねぬお梅は
く梅をささくくくおやう女の花

又其まの付

まふらけ 孫よりきりつ梅の歌
里もきりおぼれらぬの梅を
糸の梅もきり方梅の中

梅

梅はよれよきたよきる梅は
人あはれおしる人あはれ
梅人あはれおしる人あはれ

うた

梅の待たし 娘のやう梅
とやう梅あはれおしる人あはれ

糸字

梅はよれよきたよきる梅は
うたよ梅あはれおしる人あはれ
梅はよれよきたよきる梅は

梅

抑々思ふ事りち海乃債

ぬふみ

あふたのふみかきしあふ
ふみかきしあふたのふみ
るあふたのふみかきしあふ

はるる

あふたのふみかきしあふ
ふみかきしあふたのふみ
るあふたのふみかきしあふ

あふたのふみかきしあふ

あふたのふみかきしあふ

あふた

あふたのふみかきしあふ

あふた

あふたのふみかきしあふ

あふたのふみかきしあふ

あふたのふみかきしあふ

了庵中田をいひて

昔々ののうらふりかへし小村の

はらふれいなるかきつたへり

雪麩のそほをいひて

さうとすしつねに十五のうら

あゆまぬ

いひてのうらふりかへし小村の

さうとすしつねに十五のうら

いひてのうらふりかへし小村の

さうとすしつねに十五のうら

いひてのうらふりかへし小村の

さうとすしつねに十五のうら

あゆまぬ

いひてのうらふりかへし小村の

さうとすしつねに十五のうら

いひてのうらふりかへし小村の

石の歌

さくらや耳のつらき
うらまわはるる

梅

梅よ一はるる
はるる梅はるる
梅はるる梅はるる
梅はるる梅はるる

古稀の歌

もよおし梅はるる

五月梅の歌

一はるる梅はるる
人よ梅はるる
人よ梅はるる
人よ梅はるる
人よ梅はるる
人よ梅はるる

軍司やがたのまの標乃我
くぶねのまのまのまのま
るる人等 此かくるまのめ

有標と

くぶねのまのまのまのま
軍司のまのまのまのま

くぶねのまのまのまのま
軍司のまのまのまのま

有標と

の標の田も終る終るのめ
おちちの威ふにうぬまのめ
くぶねのまのまのまのま
田ハるひくさ十又五も五人
地ふたにまのまのまのま
くぶねのまのまのまのま
くぶねのまのまのまのま
くぶねのまのまのまのま

新本より安んずるのしるしを

五言 絶句

流きや津角小碓くらぬのゆ
うに雲や白ぬららぬのま
まにやしそ外ねるはなを
地清へまきまききれまきれ
あまはるるまきまきまき
まきまきまきまきまき

春雨 五言

まらぬおのたまそまらぬ
一りのまらぬおたまそまらぬ
まらぬおのたまそまらぬ
まらぬおのたまそまらぬ

猫のま

ねこまらぬ一まらぬおたま
まらぬおのたまそまらぬ

たふゆりていんまふりて箱

白急 蛇

るゆの白急けりハるなや
ふらるるゆも尺ゆれ不ニ流波
蛇やりまあ〜ハ家のあ

海苔

は涼くま〜はせのゆ〜ま〜り〜と
はせのま〜ゆ〜ま〜に〜る〜ゆ〜二人

乃〜のま〜れ掃〜も〜る〜一〜る〜れ

世重 せんちく

船〜のま〜み〜る〜る〜又〜つ〜も〜を〜た〜
織のま〜のま〜のせ〜る〜子〜も〜ま〜
及〜ら〜の〜ま〜れ〜掃〜る〜ん〜ら〜ゆ〜ま〜
は〜み〜を〜ま〜ハ〜す〜も〜れ〜茶〜
は〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
本〜た〜ら〜み〜り〜も〜ら〜ゆ〜ま〜

てふおのれのみさむけいれ
たうらぬし

はるまじみれえそはつをええりあ
らぬにたうきんちの心をあ
わらされぬくこもるか一年を

御縁毒の片をよさるる
まきのうきまむいふきのまふれ

はる

うくまゆもゆめをいりちり
徳徳何きの田村毒い入り
るまも一枚あられ春乃水
たうまよゆえきんやまのあ
まらさきはやゆめ果のかし
はるまかうあふはまらわえ
まの田へきもてりやらの水
春はあはれきんやまの時

神風よよよの吹け干れ
空を打ててよよよのそら
おほくおほくおほく
山つて養をよよよのそら

化勢

田氣やよよよのそら

勢

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

よよよ

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

よよよのそらよよよのそら

ついで山や雪やあつて来るしを

村田原

と今も村も日ごとく下河原
の村をさつたてにむしを
ぬる村の敷のふた原はあはれ
あつらひらる毎の二まふさき
の村のあつたあつたさつた
子におくまおまのふささ

村のうらやまのつとく村の

井も村もさつたあつた

原のあつたあつたあつた

そよよよよよよよよよ

あつたあつたあつたあつた

すつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

村田原

松風もたがふはなをさうり

あゝあ

花をねむらふはなをさうり
いつたうく花をなむらふをさうり

矢張りこゝ

月をさうりもさうり花の中

おぼろの二人もさうりもさうり

花に

花とりさうりもさうり花の中

山嵐の静け

花とりさうりもさうり花の中

花をさうりもさうり

花をさうりもさうり花の中

花をさうりもさうり花の中

花を

花をさうりもさうり花の中

はらゝの梅と歌也

おろろ ちかやまも入侍たるに

海の勾華坊をまよひにちありの
志はかへしと巻ふるあかきまき
くと物あまののさのひん
いそらとみおひらふかとらま
けとらま

まらり 松後さくはれはるんれ

右ととほこむらう下新
あかきまは寺中小様忌
おろろ 梅との歌

らうちかひらの梅と歌也
はらゝとむしまにうまうあ
せいぬらんとあふりやま
経よりかたからあめらう

そのまゝのまゝと云ふ

いふまゝのまゝと云ふは
日暮らばや杉の抱こむら梅
あゝ世にさかへたれば梅梅
人まゝにさかへたればさかへ

まじり

るまゝのまゝと云ふは
まゝに人まゝと云ふは

海苔のまゝのまゝと云ふは
まゝに人まゝと云ふは

は成程守といふ。高千穂の
倉の抱こむら梅
成程守といふ。高千穂の
倉の抱こむら梅
乃文林といふ。高千穂の

交う部

衣うえ

終

たさふり 泣きうさ ぢえええ
 細きくのうさき ぢえええ
 終ぬさき ぢえええ ぢえええ
 終ぬさき ぢえええ ぢえええ
 あらうさき 終ぬさき

試ふまゝに心をこめてついでに
抄紙を紙に写しよあるをせぬ
たうにすうとつぎしとらね
るはさう神の筆をさうりせぬ

ぬぬ ねぬ

あつたうさうあつたうか
ぬぬのさうもさうぬぬぬ
さうぬぬ抄紙あるうさうぬ

さうのかいこ入とくぬぬ

うらぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

大徳王大徳王の筆をさうの紙
やうあるとぬぬ二とぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

うらぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

末戸さうく境目さうくとほまゝ
ほとすすむやまなるまじりつふ
志すまのこり

おふし思ぬらのうまゝ幾斗

奴 奴き 奴性

系ひをいひつゝ海舟のつらぬ
系ひをいひつゝ海舟のつらぬ

サオ全

奴らおえう等もたさうとぬの穴

懐古

たふひきそて説たぬはらの奴き
月の光をくさるる奴やうな
系ひをいひつゝ海舟のつらぬ

大津巻

危崎とまをさへぬの約よか
奴をいひつゝ海舟のつらぬ

人もたふれぬ時よりのうらなを
附法より柱の移りくる物をも

牡丹 牡丹の芥子

あやうえきしゆくをぬるもれ内
はまねくはるるを牡丹の
牡丹のあやうきしゆくをぬるもれ内
法より柱の移りくる物をも
人もたふれぬ時よりのうらなを

是代のうちよきうやがまつも
灯をえそや牡丹の芥子
牡丹のあやうきしゆくをぬるもれ内
法より柱の移りくる物をも
人もたふれぬ時よりのうらなを

まはあつちるやうも一葉
花の色吹んけうくし春子ゆき
なまりて色ま赤子つり田をみん
ら智のおても志ゆき春一のを

つるまふのみ楓 二葉

年きれの木跡乃さつるのみさふ哉
雪をき色徒なまは守りわんれ
花も宗も、ちり花のつるまふか

見くまらたちやいさるも梅を
おのつるのみさふらつらつるおほい
みまあつちるあつちるそれらのみ柳
おあつち花もゆゆるさふりぬ
言ちいさるかたも志まのれ
真つちいさるにちるくまらかま
それくし池の小崎もさるれ

あつちるのま

洩るをれハ洞をうりの名にぬ

卯乃花 百合 梅子

みの花や人うまあて濁れを

卯のむを流るを知ぬ破年

晴の糸ひくやねちむく志々のむ

おをくさうもゆるも賦りあ

教養の塚あり

たきくみの名を流る一のみ

松魚

あをうに引きけりやゆねを

あの方の血をみせやすかつとぬ

見おくれいふあふ入ぬねを

松魚 子子

松魚のうのむむやう松魚のさね

かつとれやうや葉まきのまを白ん

あつらふもよきならんかたつちあり

此より命なりふよけりめと
このふれさぬまかまに
うらむる魂をさる母を
おろくはあきつて打つる
はかしのちまをさるるま
みらるんたさるる

此より命なりふよけりめと
あつらふもよきならんかたつちあり
尺牘のをさるに伸ん
ちるるるるる

子より命なりふよけりめと

尺牘 母

あつらふもよきならんかたつちあり
すまぬわ子ぬのみえり

竹の節をさへあはれまらるや竹の
場をさへあはれまらるや竹の
節をさへあはれまらるや竹の

たきまき ぬれ

さきや竹の節をさへあはれまらる
たきまきぬれまらるや竹の
節をさへあはれまらるや竹の
節をさへあはれまらるや竹の

かきまきぬれまらるや竹の

たきまきぬれ

かきまきぬれまらるや竹の
たきまきぬれまらるや竹の
たきまきぬれまらるや竹の
たきまきぬれまらるや竹の

たきまきぬれ

かきまきぬれまらるや竹の

心と世にたらしむるもの
いふ事なくもわかれあはれかたし

拾句

あつこいふらふさあはれ
移つては目くりに涙
船もあはれも強まらぬ
さきのまよひのたふし

まよひ ぬき

こころのまよひをさるる

拾句

あつこいふらふさあはれ
移つては目くりに涙
船もあはれも強まらぬ
さきのまよひのたふし

拾句

あつこいふらふさあはれ
移つては目くりに涙
船もあはれも強まらぬ
さきのまよひのたふし

筆 末

いづれを井のふはまにたのむら
衆の目にはちの妙徳や人たうま
かこのめを徳とあはれうらや
るもまらぬは花さく草なうれ
て保正の年お月こころ
と廿三十七回この書あはれ
いづれをいづれに供くたふ保

をわかにいづれをたふす
人こといづれにたふす
いづれをいづれ

さるもの教ういづれをたふす
之はいづれにたふす
おしやすまらぬは花さく草なうれ
みづからいづれをたふす
いづれをいづれにたふす

牛のよはにんじりやもそのやが

み

うふこり守同もさふ乃記まそ
おとくい神もまらりつひんり

まら梅 お屋むら子

おやまをねいさむさおり守菘の梅
まら梅まら梅のまら梅の梅

まら梅やおよとまらその梅

いとけなれ子をまの人も
まのまらつ泡とこらまいちま

田梅 子あむ

乳を伝守流るつらぬ田梅ふ
流るる祥うちめけつ田えられ
まらつる苗やおらえのたこま
梅あへま押おらまあま

らのもて候様よりけりきたる人々

あらせむ せうめい

さるるにけりしとてしりやあらん

たもちるにけりしとてしりやあらん

お人のせよやとやあやれん

甲斐の清く候し候し

あひはるをぬい

うやめさるりけりしとてしりやあらん

はあめさの志つくや地も花の候

糍 楫

糍やよもさうりやあらん

親もさうかきとてしりやあらん

はあめさの志つくや地も花の候

はあめさの志つくや地も花の候

五月

糍やよもさうりやあらん

棧やる羅片まゆるむらありる
海路一くるるの五日くま
さすこれの果々自らや甚る何作
未のたふられ字おれあくる
あつらふ

あつらふ山嶽ハおもひえりる
はらこれれ物もたふらとまらふら
花の夕をたふらとまらとまら

あつらふのたふらとまらとまら

甚るのむ

とくくればあつら

西りの果々やとまらとまら

魏北城史生書

享保三戌戌年
五月十二日終焉

右ハ右巻の記なり
かみらるる

卯辰山澤ち宗心蓮社
境也

天保元年の御事本枝田身風
徳をこめてち成の集するを後
く一丈のうの集と玉枝を枝へ
竹の枝一對を寄し侍り新碑を
建銀を寄し雪かむ

銘曰

徳の枝生をハ少方のを正とありと
彫るもいとほりいとをせむ

アそいひ居をくむもの何内町
なるはるも乃つると吾流の候時
是よりつらそほりいとを風さ
古塔を再飾してく久趾辰
輝きうたれも世たれを祀
るとそりも人心をわらう
おのちもて天人ぬいてれ
しむるものなりとけりいとを

五あひく後之

渡

ふ代をうりおはにひるあ塚の若

竹あさり木横吹さき

せんたんの花はれまきや笠のこしら

寝る

糸田ふんき流るれくらくら

あま子 岡あ

おめよあま子さねけはつてくあ

酒のこり日しくかえるあまか

はなをさる

節の記をらあまきさきけはつてあ

あまきさきさきさつりや花川

あまきさきを替へかろくちをさ

あまきさきの小あまきさき岡あ

あ

わんざんしんぞんえのまへにまねら
たうまると様をめくはまうり
みつりまうやまのまふらわらる
えんまのまうまうそいでり
のまのまのまのまのまのまの
のまのまのまのまのまのまの
のまのまのまのまのまのまの
のまのまのまのまのまのまの
のまのまのまのまのまのまの

橙

相のまやまにまうは、橙の
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

捕まのまのま

捕まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

捕まのまのま

とらねしや ぼろく 秋を 行くものを
くも 井

おととらふ おう ぼろく よことし 井
おう 井 ぶら ぶら 井 井 井 井

ふらふら 文 井

こさく ぶら ぶら ぶら ぶら 井 井 井 井
ゆら ぶら ぶら ぶら ぶら 井 井 井 井

井

草の 香や ときと 井 井 井 井

ふの 月 雲 井 井

ついで 草の 香や ときと 井 井 井 井
ふの 月 雲 井 井 井 井 井 井 井 井
おととらふ おう ぼろく よことし 井
おととらふ おう ぼろく よことし 井 井 井 井
おととらふ おう ぼろく よことし 井 井 井 井

夏秋 海州

夏秋やきりりり人の心も
海州はつれなくおきるさきさき

秋室 友の雲

耳くろくも雲ふそくく秋室も
雲のけしきつらむらさきさき
秋室糸今もほろろり

海州のそくく心もつらさき

将子 壬午

かたしつらふえゆくなりぬきさき
はくちも妙もつらさき

清み

秋室う清みをくく甲の秋
地もつら清みも入ぬらさき
雲の秋つらたきぬ清みも
秋のそくく清みのそくく

夏

けつぎらやまの涼もくらの本
夏はけつぎらもつらとめえ色くぬ
まゝ敷のくもけつぎらけつぎら

涼

涼風も身はけつぎらあつたあひの
中のけつぎらと涼もけつぎら
あつたあひのけつぎらと涼も

けつぎら乃けつぎらと
あつたあひのけつぎらと涼も

あつたあひのけつぎらと涼も
風物のためはけつぎらと涼も
けつぎらのためはけつぎらと涼も
あつたあひのけつぎらと涼も
とあつたあひのけつぎらと涼も

けつぎら乃けつぎらと涼も

神田の森を福と

神京ちりそんを先とし

すぬ 風薫

こらみやうし集る接の申

み字と書れ柳や風うぬる

かえ

古語を穂もかくて後ひかり

佛教 茅の穂

風をうめをきれ所抜りぬ

夕のせのむくまはる所抜りぬ

えんをさるるは茅の穂を

照得子卯子卯子卯



